学部長改選

4学部長が再任

任期満了に伴う5学部の学部長選が各学部教授会で行われ、文学部長に髙久健二教授が選出された。経済学部長には田中隆之教授、経営学部長には青木章通教授、人間科学部長には下斗米淳教授、国際コミュニケーション学部長には根岸徹郎教授がそれぞれ再任された。任期は本年9月1日から2026年8月末まで。

新任の髙久文学部長に、学部の特色や抱負などをお聞きした。

新学部長に聞く

文学部長

髙久（たかく） 健二（けんじ）

多様な学問体系を基礎にして幅広い教養を身につけ、専門性を深める、これが文学部の特徴といえます。

日本文学文化、英語英米文、哲学、歴史、環境地理、ジャーナリズムの6学科があります。教員の数は学内で最多、各教員の専門分野は実に多彩です。徹底した少人数教育と充実したゼミナール活動で学生一人一人のニーズに応えます。

文学部というと机の上で本を広げて、というイメージもあるでしょう。それも大事な一面ですが、本学では実習や調査を重視しています。私の専門の考古学では、発掘調査で実際のスキルを体得します。夏期休暇中に3週間の遺跡発掘調査合宿を行い、約60人の受講生が1週間ずつ参加します。授業として発掘調査実習を行っている大学はほかにあまりありません。学生の主体性を重視し、話し合いながら方針を決めていく。その中で私が教えられることも多々あります。まさに双方向のアクティブラーニングですね。

また、自然科学の分野も包括している環境地理学科ではフィールドワークを重視しています。ジャーナリズム学科も現場主義を徹底、ほかの学科でも創作や発信が盛んに行われています。理論と実践、この二つが両輪となっています。

好きなことをとことんまでできるのが文学部です。しかし自分はなにが好きか、入学当初は分からない学生もいるでしょう。そのために導入専門科目も広く展開しています。カリキュラムの自由度は高く、ほかの学科の授業も受講できます。さまざまな選択肢のなかから、自分が好きなものを見つけて突き詰めてほしいと思っています。

「積み立て型」で深まる専門性

文学部の学びは「積み立て型」です。一足跳びに結果は出ません。授業やゼミナールで読み解く力、書く力を段階的に身につけ、徐々に専門性を深めていき、その到達点として卒業論文があります。

同時にグローバルな知識も会得してほしいですね。専門分野に海外の視点を取り入れると捉え方が変わるでしょうし、あるいは個人的に語学を磨く、留学をするなど、さまざまなアプローチが可能です。世界の動きの中から日本を見る目を養ってほしいと思います。

【略歴】韓国・東亜大学校大学院史学科博士課程修了。文学博士。2010年本学文学部教授。専門は朝鮮半島の考古学。高校時代からシルクロードに興味を持ち、九州大学へ。そこでアジアの歴史的なつながりを実感したという。おすすめの遺跡は、関東なら埼玉県行田市の埼玉古墳群。「生田キャンパス周辺にも遺跡がたくさんあるので、ぜひ見てほしいですね」。茨城県出身。56歳。

文科省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度（応用基礎レベル）」認定

本学が実施している教育プログラム「Siデータサイエンス教育プログラム」は8月、文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度（応用基礎レベル）」に全学部が認定された。

本学では、ビッグデータとAI（人工知能）が駆動する超スマート社会を生き抜く力を身につけ、社会の諸課題を解決する手段の一つを養うことを目的にプログラムを展開している。

Siデータサイエンス教育プログラムは、2022年度に同年度の全学部新入生を対象として基礎的な知識を学ぶ「基礎リテラシーレベル」が、ネットワーク情報学部では2019年度以降入学者を対象に更に深く学ぶ「応用基礎レベル」がスタート。23年度には応用基礎レベルの開講を全学部に拡大した。

23年8月には「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度（リテラシーレベル）※全学部」「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度（応用基礎レベル）※ネットワーク情報学部のみ」が認定を受けている。

プログラムの修了者には、デジタル証明書「オープンバッジ」を発行する。SNSやメールの署名、履歴書などに貼り付けて、修得した能力や知識を証明することで、就職活動や進学などでアピールできる。

全国の私大で、全学で応用基礎レベルの認定を受けているのは38校。

対象：全学部（2023年度以降入学者）
※ネットワーク情報学部は2019年度以降入学者
認定有効期限：2029年3月31日

大学院ジャーナリズム学専攻開設記念

戦争と平和考える

多くの方が来場したシンポジウム

来年4月の大学院文学研究科のジャーナリズム学専攻開設と、東京新聞創刊140周年を記念したシンポジウム「戦争を伝えるということ」が8月20日、神田キャンパスで開催された。作家の浅田次郎さんによる講演、本学の山田健太文学部教授ら4氏によるシンポジウムが行われ、戦争と平和について考えた。

講演する浅田さん

本学は今年4月に中日新聞社と連携・協力に関する協定を締結。中日新聞東京本社発行の東京新聞創刊140周年記念と合わせて、今回の企画を共催した。会場には佐々木重人学長はじめ本学関係者のほか、500人超が来場し、講演や討議を熱心に聴いていた。

浅田さんは「戦争と文学」と題して基調講演。「戦争はあらゆる文化を破壊するが、ただ一つ、戦争文学だけは成立して残る。文学を通して、戦争の本質を学んでほしい」と語った。

続くシンポジウムのテーマは「世界から戦争をなくすには」。浅田さん、山田教授に加え、中東地域研究や難民問題を専門とする本学文学部兼任講師の児玉恵美さん（平26文）らが登壇。それぞれの活動や研究について紹介した。

山田教授は「戦争を自分ごととしてどこまで考えることができるか、ということが問われている。新設される大学院ジャーナリズム学専攻では、賢い市民を育て、日本社会を少しでも変えていくことができればと考えている」とまとめた。

司会は沖縄テレビアナウンサーの小林美沙希さん（平28文）が務めた。

ゲートキーパーの役割と重要性学ぶ

身近な人の悩みに気づき、支えるための方法を学ぶ「ゲートキーパー研修」が6月24日、神田キャンパスで開かれた。千代田保健所と本学学生相談室（小峰直史室長）の共催で、商学部・佐藤由美教授の「社会科・地歴科教育法1」の授業内で行われた。NPO法人地域福祉推進事業団いのちのほっとステーション（千代田区）の渡辺和弘代表が講師を務め、学生や教職員など約50人が受講した。

大切にしている価値観について話し合う学生

自殺者数の高止まりが続くなか、生きることに悩んでいる人を守る「ゲートキーパー」の重要性が高まっている。今回の研修では、ゲートキーパーの役割として▽家族や仲間の変化に気づいて声をかける「気づき」▽本人の気持ちを尊重して耳を傾ける「傾聴」▽相手の話をじっくり聴く「受容」▽早めに専門家に相談するように促す「つなぎ」――の4点について理解を深めた。

受講した法学部3年次生は、「誰かのために行動することには勇気がいるが、一歩踏み出すことで救える命があると改めて感じた」と話した。

訃報

新山雄三氏（にいやま・ゆうぞう）名誉教授・元法学部教授
6月14日、83歳で死去。1991年から2011年まで在職。専門は会社法。

瓶子長幸氏（へいし・ながゆき）名誉教授・元経営学部教授
7月20日、74歳で死去。1980年から2020年まで在職。専門は会計学。

川口順一氏（かわぐち・じゅんいち）名誉教授・元商学部教授
7月27日、89歳で死去。1978年から2005年まで在職。専門は会計学。

水谷弘氏（みずたに・ひろし）名誉教授・元商学部教授
8月4日、88歳で死去。1975年から2006年まで在職。専門は英語。

枡田大知彦氏（ますだ・たちひこ）経済学部准教授
8月26日、56歳で死去。2014年入職。主な担当は、経済史。

萩原稔氏（はぎわら・みのる）名誉教授・元商学部教授
9月7日、93歳で死去。1964年から2001年まで在職。専門は商業政策。

ハラスメントのないキャンパスへ

見かけぬ言葉

時代を振り返ると、我々の周囲には、かつては見かけなかった言葉が、いつの間にか当たり前のように存在していることに気付かされる。「エコロジー」「ブラック企業」「ジェンダー」などは、いまでは文字通り人口に膾炙（かいしゃ）していると言えるだろう。もう少し遡れば、「公害問題」「ウーマンリブ」「嫌煙権」「校内暴力」なども思い出されるものの、いまの大学生にとっては、馴染みの薄くなった昔風の言葉といえるかもしれない。

「ハラスメント」とは、こうした我々を取り巻く、最も喫緊な現在進行形の言葉の一つに位置づけられるだろう。社会情勢の変化によって、それまで平然と見過ごされてきた事態に内在する重大な危険性が浮き彫りとなり、人々がにわかに注目する問題となってきたのだ。

実に長い間、ハラスメントを受ける被害者の苦しみ、怒り、恐怖、悲しみ、無念の思いというものは、「いじめというものは、いつどこにでもあるものだから、それほど騒ぐことはない」「いじめられる側にも、それなりの理由がある」等々の心無い言い訳によって完全に黙殺され、加害者側の行為も、いささかの罰則すら受けることもなく不問に付されてきた。

しかしいま、「ハラスメント」という新しいキーワードを見いだした私たちは、この言葉の持つ意味を直視して、先に挙げた数多の時代の言葉たちと同様に、一人一人の人間を大切にするという社会を実現するための、道標の一つとしなければならない。

（キャンパス・ハラスメント対策室員　内田欽三）

キャンパス・ハラスメント対策室　TEL：044-900-7858　E-mail：camhara@acc.senshu-u.ac.jp